

青年期における「泣くこと」に関する研究
－対人的状況に着目して－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
岩田直子

本研究は、青年期男女を対象として、「泣くこと」による自己の心理的変化および他者への影響に関わる特徴を探索すること、青年期男女における泣いた際の対人的状況選択に関わる要因を探索すること、青年期男女にとって「泣くこと」の果たす役割について検討し、涙の持つ肯定的側面について検討することの3つの目的の下、量的および質的アプローチの両面から、探索的に調査を実施した。

研究1では、“泣いたことによる自己の心理的変化”尺度、“他者への影響”尺度の各下位尺度得点平均値について、性別（男性・女性）×対人的状況（「他者の前」・「気付かれ・話した」・「人知れず泣き」）の二要因分散分析をそれぞれ行った。その結果、対人的状況については、“消極的態度の形成”因子において主効果が見られ（ $F(2,274)=5.014, p<.05$ ）「他者の前」群より「気付かれ・話した」群および「人知れず泣き」群がそれぞれ有意に高い得点を示した。また、“他者との絆の実感”因子においても主効果が見られ（ $F(2,274)=5.533, p<.05$ ）、「他者の前」群が「人知れず泣き」群より有意に高かった。そして、“否定的評価”因子において、性別および対人的状況の主効果がみられた。女性より男性が有意に高く（ $F(1,173)=11.109, p<.01$ ）、「他者の前」群より「気付かれ・話した」群が有意に高い得点を示した（ $F(1,173)=4.054, p<.05$ ）。

研究2では、BigFive尺度を用い、5つの下位尺度得点平均それぞれについて、研究1と同様に、二要因分散分析を実施した。その結果、“外向性”因子において、対人的状況の主効果がみられ（ $F(2,273)=6.564, p<.01$ ）、「人知れず泣き」群より、「他者の前」群および「気付かれ・話した」群において、有意に高い得点を示した。

研究3では、泣いた際の各対人的状況（「他者の前」・「気付かれ・話した」・「人知れず泣き」群）×性別（男性・女性）×最近泣いた回数（多・少）の計12名の調査協力者を選出し、半構造化面接を実施した。佐藤（2008）を援用して分析を行ったところ、【Ⅰ.泣いた「エピソード」について】【Ⅱ.泣いた際の対人的状況】【Ⅲ.泣いたことによる変化】【Ⅳ.今の泣き方を形成したプロセス】【Ⅴ.泣くことに対する意味付け・役割】計5つの上位カテゴリーが生成され、泣いたことによって気持ちの整理が出来ることや、他者との関係性が深まること等、泣いたことの肯定的側面等について語られた。泣いた際の対人的状況選択には、その場の状況や相手との関係性等によって関わる要因が異なってくるものの、本調査からは、人前で泣いたことによって相手から肯定的な対応を受けた経験等が関わってくることを示唆された。